

2021年10月24日 収穫感謝礼拝(降誕前第9主日礼拝)メッセージ

「天地の恵みによって生かされて」

牛田匡牧師

聖書 創世記 2章 1-9、16-17節

先週は急に寒くなった一週間でした。ずっと残暑が厳しかったのに、急に秋が来て、この調子だと、すぐに冬が来てしまいそうです。とはいえ、9月10月は、日本では「実りの秋」と呼ばれる通りに、おいしい食べ物がたくさん出て来ています。今日は「収穫感謝礼拝」です。もともとは、アメリカの祝日である「サンクスギビング・デイ」に合わせる形で、日本キリスト教団でも11月の後半の日曜日と定められています。今から400年前に、イギリスからアメリカ新大陸に信仰的自由を求めて、入植・移住した102人のピルグリム・ファーザーズが、到着直後の厳しい冬の寒さの中で、次々と倒れ、およそ半数になりながらも、現地の先住民に助けられながら、開墾を続け、到着翌年の秋に、お世話になった先住民たちと共に、初めての収穫を神に感謝したというのが、その由来だそうです。時代と共にその祝日、祭日の過ごし方は変化してきているとはいえ、そのピルグリム・ファーザーズの伝説は、いわばアメリカの原点の一つとも言えるものなのではないか思います。

収穫感謝のお祭りというのは、何もアメリカに限らず、世界各地でそれぞれに行われているようです。それこそ日本のだんじり祭りも、秋の収穫作業を終えて、その実りを感謝して、また翌年の豊作を祈願するというのが、もともとの原点だったのではないかと思います。

田畑を耕し種を蒔き、水をやったり、草を抜いたり、また果樹を剪定したり、肥料をやったり、農業にはお休みはありません。しかも、そうやって何か月もかけて、たくさんの手間をかけて、お世話をして、確かな収穫が約束されているわけではありません。最後は自然任せです。だからこそ昔から人々は、そこに自分たちの力を越えた神の働き、天地の恵みを見て取って、来たのでしょう。私たちの足元にある地面は、単なる地面、歩いたり、建物を建てたりするための地面なのではなく、私たちが食べるもの、命を生み出す大切な土です。硬い種、まるで死んでいるか眠っているかのような種を蒔くと、そこから芽が出て、何十倍もの大きさや数の命、食べ物が出て来ます。それは決して当たり前のことではなく、まさに奇跡ではないでし

ようか。さらに土は、私たち生き物が還って行く所でもあります。

今回の聖書のお話は、「天地創造」と呼ばれる、いわゆる「世界の始まり」の時のお話でした。この分厚い聖書の冒頭、一番初めにある「創世記」の1章と2章には、2つの創造物語が書かれています。1章の方は神が7日間で世界を創ったというお話が書かれています。2章の方ではそのような書かれ方はしていません。神が大地と天を造り、水を湧き上がらせ、土の塵で人を造ったとあります。「土で造られ、鼻に命の息を吹き込まれた」というのは、顔の中心にあり、呼吸を通して身体の奥深く中心にまで、神の霊である命の息が届けられたということの表現ではないかと思います。古代日本語である大和言葉でも「生きている」という言葉と、呼吸の「息^{いき}」という言葉は同じ語源ですが、生まれ落ちた赤ちゃんが産声を上げてから、歳をとり、息を引き取るまでの間、ずっと呼吸をしていて、「息をしていることが生きていること」というのは、古代の人たちにとっても自明のことだったのでしょう。

そして人間を創った神様は、人間をエデンの園に連れて行き、そこで暮らすように言いました。そこには見るからに好ましく、食べるのに良さそうなあらゆる木が生えていて、「善悪の知識の木」以外なら、どの木からでも取って食べてよいとされていました。人間がエデンの園に連れて来られたのは、「そこを耕し、守るためであった」とあります。しかし、「さあ、ここがあなたの土地、あなたの畑です。これから自由に作物を作りなさい」と言って、何も持たないまま放り出されたのではなく、人間が働き、耕す前から先に、十分に神様から様々な食べ物を備えられ、与えられていた、というのが、興味深い所です。天地の恵みは人間が造り出すものではなく、あらかじめ神様によって「よいもの」として創られており、人間はそれを破壊しないように、正しくお世話して管理するということ、任されているということなのだと考えることができます。例えば、オリンピックの開催に合わせて、盛んに耳にするようになった国連が提唱している「SDGs(持続可能な開発目標)」も、そのようなものでしょう。

私たちは自分たちの力で生きているのではなく、神様の力、天地の恵みによって生かされている……。そのことに反対する人はあまりいないでしょう。しかし、昨年

から続いているこのコロナ禍の中、私たちは「だから、神様ありがとう」と言うだけでは収まらない現実に向き合わされています。それは全世界的な物資の供給網（サプライチェーン）のことです。世界各地で感染爆発が生じ、都市封鎖が行われたり、港・港湾の封鎖や制限が行われたりしています。特に海上輸送の海運網は混乱していて、世界中の海運の約 1 割が港に入ることが出来ずに海上を漂っているとも言われています。当然、物資は届けられませんから、供給が遅れ、価格が高騰しています。ガソリンも小麦粉も大豆も木材も、世界中で目に見えて値上がりして来ています。

また輸送網だけではなく、各地の生産工場でも集団感染によって操業停止が余儀なくされています。半導体が手に入らないということで、自動車もコンピューターも、ガス給湯器も、何カ月待ちとなっているそうです。さらに農業の現場でもたわわに実り、収穫はあっても、働き手が足りないという事態も起きているそうです。日本の「外国人技能実習生・特定技能実習生」もそうですが、世界各地で外国人労働者の移動が制限されたために、各国で深刻な労働力不足が起きています。

20 世紀の後半には、様々な分野における技術革新によって、世界の国々は対立を乗り越えて、一つの地球として「グローバル化の時代だ」と言って来ました。しかし、それは先進国が、途上国に対して、より安い価格での生産や労働を押し付け、搾取して来ていただけのことでした。今、世界各国は再び国際流通・供給網が途絶えても、各地域で自給できる経済のあり方へと舵を切り始めました。世界の中でも、とりわけ食料自給率が低く、かと言って地下資源があるわけでもない日本にとっては、大変な方向転換ですが、にもかかわらず、そのようなことを述べる政治家はほとんど見られません。

なぜ日本では食料自給率が少ないのか、工業製品でも外国産の輸入品が多いのか、それは国内で作ると高くなってしまって売れないからです。消費者に買ってもらえなければ、商売としてやっていけない。大変な思いをして農産物を作っても、安くしなければ売れず、安くしているから売れてもお金にならない。農業では生活が出来ない、となると当然、農業に携わる人は減って来ますし、新しく農業に携わろうという人も増えないという悪循環です。スーパーマーケットに行くと、遠い地方から運んできたものや、外国産のものが、地域で獲れたものと同じような価格

で並んでいます。それは当たり前前の光景かもしれませんが、そこに運んでくるまでの手間ヒマを考えると、決して当たり前ではないはずです。その裏には市場原理の下、買い叩かれている生産者や流通業者が隠されています。

お互いに相手を知っている間柄で、作ったものをもらったり、交換したりしている時には、それは単なるモノではなく、「〇〇さんからもらったもの」であり、それに対してすぐに文句を言ったり、直接いじわるをしようと思う人はあまりいないと思いますが、私たちが普段接している多くのものは、それを作った人がいて、仲買業者がいて、運ぶ人がいて、小売の人がいて、というように、いくつもの人の手を介しているうちに、相手の顔の見えないただのモノになってしまっています。だからこそ、私たちは店頭では胸を痛めることなく、価格だけを見て購入することができます。しかし、実際には、その向こう側には「工場隔離」と言って、コロナの感染を防ぐために家に帰ることも許されず、工場内に缶詰めにされて働かされている途上国の人たちがいます。そのような生産者一人一人のことを思う時、私たちはこれまでと同じ感覚でいることは出来なくなるのではないのでしょうか。

今、私も含めて多くの方は、農業などの生産の現場には携わっていません。しかし、どの生産物を買うか、食べるかを正しく選ぶということもまた、生産者たちを応援することにつながっています。天地の恵みに感謝して、一つ一つのものに感謝して頂くと共に、神様が私たち人間に備えて下さっているその天地の恵みが、この地球において今後も持続していくことが出来るように、私たちは学び続け、その生産現場に携わっている方々と出会い続け、そしてそれによって正しく選んでいくことができるように、そのような道へと私たちは導かれて歩んでいきます。